

〔地名字音轉用例〕タノ行ノ音同行通用セル例

つくし・筑紫國チクモチキノク 筑モ作リヲツクニ用ヒタリ

〔釋日本紀五述義〕筑紫洲

私記曰、問、此號若有意哉、答、先儒之說有四義、一云、此地形如木兎之體、故名之也、木兎鳥之名、此云都久二〇二下脱二字恐公望案、筑後國風土記云、筑後國者、本與筑前國合爲一國、昔此兩國之間山有峻狹坂、往來之人所駕鞍轎被摩盡、土人曰鞍轎盡之坂、三云、昔此坂上有龜據一本改龜原作庶、猛神、往來之人半生半死、其數極多、因曰人命盡神、于時筑紫君肥君等占之、今筑紫君等之祖龜依姬爲祝祭之、自爾以降、行路之人不被神害、是以曰筑紫神、四云、爲葬其死者、伐此山木、造作棺輿、因茲山木欲盡、因曰筑紫國、後分兩國據一本補國原脫、爲前後、

〔筑前國續風土記一總論〕此國を筑前と名付し事、古は筑前筑後一國にして、これを筑紫といへり、故に日本紀等の古書に筑紫といへるは、多くは筑前筑後をさせり、又九國をすべて筑紫と稱し、或は九州の内筑前筑後の外をも、筑紫と云し事も間これあり、筑前は古ヘ官府のありし國にて、九州二島をすべてまつりごちし所なれば、その國の名をとりて、九國をもすべて筑紫といへり、たとへば大和に帝都在し故、日本をすべてやまと、稱せしがごとし、唐土にも亦いにしへかゝるためし多き事になん侍る略中、筑紫と名付し意を考ふるに、釋日本紀にいはく略中、右四説の内、初の説は此國の形、木兎に似たりといへり、今案するに、筑前筑後のかたち、木兎の形に似たりとも見え侍らず、九州の總圖を見るにも、其形木兎に似ず、然れば木兎に似たりと云説信じがたし、後の三説はみな盡の義をとれり、いにしへ筑紫と名付し事、一定の説なくして、民間にさまぐ云傳へたる言ばを、風土記を作れる人考へに備んだめ、ことゞく載侍るならし、何れも決定すべき説なし、○中ひそかにおもふに、いにしへ異國より賊兵襲來るをふせがんとて、筑前の北海